受難の主日（枝の主日）

主のエルサレム入城の記念　マルコ 11・1-10
福音朗読　マルコ 15・1-39

2024.3.24 9：30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭　高木健次神父

今日わたしたちは枝の主日――また受難の主日とも言いますけれども――のごミサを通して聖週間を迎えました。これからの一週間が――正確にはこの一週間とそして次の一週間もですけど――教会の中で、イエス様の死と復活を記念する大切な時を過ごすということになりますが、今日の枝の主日の最初の時には外で、行列の前に、マルコの福音書を通してイエス様がエルサレムにやって来られたときのことを思い起こしました。

マルコの福音書によれば、イエス様は公生活――つまり、父である神様がどういう方かということをご自分の言葉とそして行いによって人々に示すという、神の国が近いということを表わす――その公生活をガリラヤでずうっと行って、そして公生活の中で初めてエルサレムにやっていらっしゃるという、そういうことになっています。

で、そのエルサレムにやって来るイエス様を、ガリラヤでのいろいろな出来事を聞き知っていた人々、またガリラヤから付いて来た人々が、道に自分の服を敷き、また服が足りないところは枝を切って来て道に敷き、絨毯のようにして王様を迎えるようにイエス様を迎えようとしたっていう場面です。

でも、それに対してイエス様は、人々が期待していること――ご自分の特別な力によって人々の願いを叶え、そして願いの中でも特にローマを追い出して自分たちの国を強い国にし、そういう意味でいい目が見れるようにしてくれる、自分たちが支配する者になるっていう、そういう希望を持ってイエス様をお迎えするっていう心をご存知だから、敢えてろばに乗って、って言うことなんです。疲れちゃったから、ちょっとろばを持ってきて、それに乗って、っていうことじゃありません。旧約聖書の預言者の言葉になぞらえて、ほんとの王というのはろばに乗って来る、柔和な者であり、そして平和をもたらす者なんだっていうことを表わす。そういうためにろばに乗って、でもそれぞれの人々の願っている思いが敷き詰められた道ですけれども、その上を通って、しかしご自分の使命を果たすためにエルサレムにやって来られたっていうことです。そして、それは、イエス様がなさろうとしていることというのは、十字架――今日の第二番目の福音書です――十字架の場面で明らかにされて行くっていうことになります。

ところで、イエス様が過越の祭りのためにエルサレムにやって来られる、その時期に一週間前にエルサレムにやって来られるのとときを同じくして、エルサレムに

反対側の西側の門から入って来る、そういう一団があります。それが、先週もちょっと申し上げましたけれども、過越の祭りのときには多くの人がエルサレムにやって来る、そしてユダヤの「自分たちこそが神様に選ばれているんだ」っていう思いが非常に高まる時期でもあるので、反乱が起きないように警戒する、治安を維持するために海の方からやって来るのがローマのユダヤの総督のポンティオ・ピラトということになります。ピラトは馬に乗って、そして兵士たちを引き連れて西の門から入って来るわけです。東の方からはイエス様が人々に迎えられて、しかし、ろばに乗って入って来る。

ピラトが象徴するのは、力によって自分の言い分を相手に飲ませるっていう価値観です。でも、イエス様が十字架で示されたのは、相手がたとえご自分を傷付けようとしても、自分の側からは同じようにそれをしない、そして相手とともにそこに留まるっていう姿でありました。簡単に言うならば、力によって周りに言うことを聞かせて自分に心地良い状況を作り出そうとするのか、それとも自分の側が傷を受けてでも、相手をコントロールすることではなく、相手との一致を待ち望むためにそこに留まるっていう十字架の姿という、反対の価値観が示されているわけです。

でも、イエス様をお迎えした人々の心の中では、やはり自分に心地良い状況を作り出そうとするために他者を変える、そういう力を求めていました。他者をコントロールして状況を変えて、そして自分の心地良い状況を作り出そうとするっていう意味では、西側から入って来たピラトと、そして東側でイエス様を迎えた群衆と心は同じなんです。それぞれ、力があるかないかっていう、その違いだけであって。

でも、イエス様の十字架はそういうようなものではなく、そして、人々を恐れ入らせて言うことを聞かせるようなものでもなく、また利益によって動かすものでもない。ただほんとに人間にとって大切なのは、相手をコントロールすることではなく、自分が傷付いてもそこに留まり、一致のためにその時を待ち望むことではないのだろうかっていう、その十字架の姿です。そして、その姿にほんとに心を動かされる人が一人でもいれば、神の業は続いて行く。

そして、マルコの福音書は、その一人がいたっていうことを最後に告げます。それがローマの軍団の中にいた百人隊長だったっていうことです。まさに力づくで、あるいは自分の力を見せて、相手に自分の言うことを聞かせるっていう世界の真っただ中にいる者が、しかしイエス様の姿を見て、人間にとってほんとに大切なのはこれなのではないだろうかって――聖書の中では「本当に、この人は神の子だった」（マルコ 15・39）っていう言葉で表されていますけど――その姿の中に心を動かされたっていうふうに述べてます。

わたしたちはそれぞれキリスト信者としてその思いを新たにするっていうためにこの聖週間を迎えるという面もありますけども、わたしたちはどうでありましょうか。世界で最大の宗教団体、単一の団体としては最大のカトリック教会ってこんなにすごいんですよとか、カトリック信者になれば――日本では別にあんまり利益が

あるわけじゃないけど――この学校にはいれますとか、あるいは海外旅行に行ったときに他の人の入れない場所を体験できますとか、利とかあるいはどれだけすごいかってことの中だけにその信仰のアイデンティティーを求めるならば、イエス様を見失うかもしれません。

わたしたちが、心の中にいつもある、周りをコントロールして自分に心地良い状況を作り出したいっていう、その思いとは対極にいらっしゃる、周りの人と一致するために自分自身の苦しみを耐えるっていうその十字架の姿をいつも思い出したいと思います。そうして、わたしたちが本当の意味でキリスト信者であるためには、あるいはそれを望んでいるだろうかっていうことも省みる必要がありますが、十字架上から今もわたしたちにその姿を通して語られるイエス様のもとにいなければなりません。ご自分は傷つきながらわたしたちと一致するためにそこに留まっていらっしゃる十字架のイエス様の姿がいつも心の中にあるか、そしてその呼び掛けはわたしたちの心に届いているかを振り返りながら、このごミサを、そして聖週間を一緒に過ごして行けたら良いと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。
PC　http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi
携帯　http://www.koenji-catholic.jp/mobile/